

廣田幸稔氏に初めてご挨拶したのは、あたり一面の能装束の中だった。

私はまだ根津美術館の学芸員で、夏になると短い休みの中であちこちの虫干しに出かけた。美術館近くの鐵仙会能楽堂にも連日仕事を抜け出して良く通ったものだ。昼休みを超過してもなかなか戻ることができない。

「そんなに毎日来てたらクビになっちゃうよ？」と苦笑さされていた先代の故・觀世鐵之丞氏のお顔を、つい昨日のことのように思い出す。その後、私は氏の予想通り大学へ差し戻される事態になるが、同じように金剛能楽堂での虫干しも懐かしい風景である。棧敷一杯に広がる華麗な能装束の海の中で、舞台上ではお父様の陸一氏がマイクを片手に解説をされていた。赤い絨毯、麦茶とお煎餅の匂い。夏袴も凜々しいお流儀の方々が行き来する、その衣擦れの音。きっと京都にとつても夏の訪れを告げる良き風物史だったろう。その中に、「道成寺」の装束も、確かにあった。

能の「道成寺」の周辺には道成寺物と言われる舞踊や文楽、民俗芸能が実に数多くあるが、なぜか蛇と女性は付き物で、たとえば中世の「道成寺絵巻」以外に「動物十二支絵巻」などを紐解いても、数ある動物の中で蛇だけは必ず十二単の姿で登場する。この蛇の鱗を表すのが三角形の連続模様、今日の蛇体の正体を象徴する「鱗箔」の装束である。自らを龍神の子孫と称した北条氏の家紋が「三ツ鱗」であることは広く知られており、能の「海士」の龍女にも鱗模様が良く使われる。また道成寺のほかにも、恐ろしげな般若の面を着ける曲一黒塚、葵上、紅葉狩など一には必ず登場し、曲によって装束の地色や金銀の箔の色合い、あるいは鱗の大きさが違う。その演出が演者の選択に任されるところも見所の一つだが、△は内に込められた女性の激しい感情を表す意匠といえるだろう。

近年では異なる演出もまま見られるが、この鱗箔の鬼女には黒や紺の地色に「丸紋尽くし」の縫箔を腰巻きに

着ける出立が一般的である。この△と○の組み合わせは定まった装束付として近世以前には完成していたようだ。ほかにも丸紋の縫箔は「小鍛治」の前シテの童子にも使われる。△は鱗、蛇や龍の象徴。では○は一体何を表しているのだろうか。

私たちが一日能楽堂で過ごして最も良く見る○模様は、能ではなく狂言の袴である。太郎冠者や次郎冠者。心の直ぐないスツパ。おもむろに長袴を脱ぎすてた大名まで、たいてい丸紋の半袴を着けており、能よりも狂言の方がそれこそ丸紋尽くし、といった体である。

ところで、完璧な美を競う染織技巧の難点はいかに染め上げるかよりも、いかに染めないか、という「防染」が常に基本課題であることはあまり知られていないのではない。染織の歴史はそのまま防染技術の歴史といつてかまわない。何度も糸で絞りに、板に挟み、はたまた糸のような細さで蠟や糊を置いたり、涙ぐましい職人の知恵と努力の結晶は今も西陣に息づく日本の宝だ。その中でも○の模様は布をぐるぐると縛って染料に浸ければよい最も原始的で簡単な手法である。思い立てばたいい誰にでもできる、この極めて単純な方法の単純な意匠表現は、今も狂言の世界に見るようにごく卑近な意匠として古

代から慣れ親しまれていたデザインなのである。

その感覚を芸能の演出に持ち込むとすれば、唐織のように手の込んだ立派で格式が備わった染織品や、織物の高尚なイメージから最も遠い位置にあるのがこの丸紋尽くし、という選択だったのではないだろうか。小鍛治の霊狐、道成寺の蛇体も動物の霊や招魂であり、人の姿を借りる神霊より一步譲る意識と考えれば、私の想像もあながち遠くない筈である。

○と△、どちらも今日の舞台に欠かせない素材である。様々な世界から紡ぎ合わされる長い能の歴史の中で、本日の道成寺が幸稔氏と金剛流にとつて華やかな第一歩となるよう、心から祈念してやまない。